

**取組実績の概要（2 ページ以内）**

本学はテーマⅠ・Ⅱ複合型選定校として、アクティブ・ラーニング（以下 AL）の活性化と学修成果の可視化の取組を通して学生の主体的学びの向上を目指している。さらに、総合的高大接続改革の一環として、入口改革、および出口改革も行っている。また本事業（以下 AP）における成果の発信・普及の中核となるテーマ別幹事校にも選定され、「チーム AP」のもとテーマ内、テーマ間で共同の取組を行ってきた。

**1. アクティブ・ラーニングの活性化：正課の授業改革**

AL を真に学生の主体的学びの向上に結び付けていくために、本学では「（教員の）能力に応じた AL の導入」の段階から「必要に応じた AL の導入」の段階への転換という目標を掲げた。それを保障する仕組みが AL マスター制度である。この制度では、まず個々の教員の AL 手法のスキルアップのための OJT の仕組みを作った。さらに、カリキュラムを内容面のみならず AL も含めた教育手法の点からも体系化を行い、AL の効果的・効率的運用をおこなうための仕組みも作っている。

本学における AL は「プレゼンテーション演習」から始まる。本演習では AL が高い効果を持っていることが様々な指標から明らかになっている。そして、本演習での成果を踏まえ、基礎教育の分野、こころの分野、プロフェッショナル分野など多様な分野へと AL の展開を行っている。究極の AL として重視しているのが「学生提案型授業」である。これらの科目では、学生がテーマを考え、学生が授業を準備し、学生が授業を行う。H30 年度には、シラバスを学生から公募するという学生公募制も制度化した。

**2. アクティブ・ラーニングの活性化：正課外活動の取組**

正課外活動も学生の自己教育の場として重視している。従来型の正課外活動の役割を引き継ぎながらも、現在の学生の多様化に対応すべく、新たな正課外活動の方針を策定した。これに基づき、新しい活動の場として、様々な学科内企画を創出した。同時に、全学生へのアクティビティの波及効果を目指して結成されたのが学生リーダー組織「D' \*Light」である。学科内企画のサポートをはじめ、地域や自治体とのコラボなどの独自活動も積極的に行っている。自身の成長の確認の場として活用しているのが「社会人基礎力育成グランプリ」である。H26 年の全国大会準優秀賞をはじめ、多くの賞を受賞している。さらに、「学生 FD サミット」や「短大フォーラム」などの他学の学生・教職員との交流も、活動の集約点として位置付けている。特に、H30 年、学生 FD サミット 10 年の歴史の中で初となる女子大、短大での開催をやりとげた活動は特筆に値する。また、短大フォーラムは H28 年度に本学の呼びかけで始まったイベントである。大学間連携で学生に主体的学びの場を提供する 1 つのモデルとなっている。

**3. 学修成果の可視化**

到達目標型教育への転換を加速するための可視化を行うために、本学では、大学にとって最も重要な到達目標である DP を可視化の核とする体系を構築した。

**(1) 到達目標体系・評価体系**

本学科は地域総合科学科に認定されており、多様な分野から構成されている。そこで、まずはディプロマポリシー（以下 DP）を分野ごとに具体化したミドルレベル DP（以下 MDP）を設定し、そのうえで、MDP をその分野の科目の到達目標へと展開し DP→MDP→科目の到達目標という階層的到達目標体系を構成した。次に上とは逆に、科目の到達目標の達成度を分野の MDP の達成度へと集約し、最終的に DP 達成度の評価へと集約する評価体系を作り上げた。こうして分解による到達目標の体系化と総合による評価の体系化を通して、教育課程の体系化を行った。

**(2) 総合的評価提示システム (Me-L)**

上の到達目標／評価体系に基づき、データを収集し可視化の結果を提供するシステムが「総合的評価提示システム」（以下 Me-L（ミーエル））である。Me-L では、科目の素点ではなく、科目の到達目標の達成度を最も基礎的な数値として可視化する。「何ができるようになったか」を端的に表している数値が科目の到達目標達成度だからである。そして、これらを集約することにより、MDP や DP の達成度を数値化する。こうして、DP をその達成度を追求すべき現実的目標とすることができる。さらに、Me-L では教員評価だけではなく、学生による自己評価も可視化している。到達目標型教育にとっては、学生の達成度の自覚が重要だからである。Me-L は DP 達成度の可視化の 1 つの標準的到達点を示すものである。

**(3) 到達目標／評価体系改革の PDCA サイクル**

作成した到達目標／評価体系自体を「評価」することは難問であるが、本学では「DP の各項目が独立した目標として機能していること」を妥当性の基準とした。これは、Me-L の出力を用いた各 DP 項目の達成度

間の相関係数の算出によって可能になった。これを基に実際に見直し・改革を行っている。

#### (4)外部指標導入による評価の客観性の担保

DP 達成度の数値も学内だけで閉じているのは客観的な数値とは言えない。そこで、外部指標も導入し、それと DP 達成度との相関分析を行うことにより評価の客観性を担保することとした。外部指標は、DP との相関分析だけではなく、就職データや正課外アクティビティなど他の内部指標との相関分析も行い、現状の問題点の洗い出しに用いている。

#### (5)DP 達成度の全体的評価

Me-L は、1 つの DP 項目を多数の科目到達目標要素に分解し、それら要素の評価の合計により DP 達成度を評価しており、DP 達成度評価の分析的方法だと言える。しかし、この方法だと、学生が突出した特徴を持っていたとしてもその特徴をつかむのは難しい。そこで、DP を要素に分解せず、全体としてその質を評価する仕組みを構築し Me-L を補完することとした。この新たな評価法は、DP を要素に分解しないという点で DP の全体的評価法だと言え、分析的評価法とは相補的な関係にある。そこで、学生自身が DP 達成に関連するエビデンスを収集・発表し、それを評価するというポートフォリオシステムを構築した。

#### (6)長期的学修成果の可視化

卒業後、学生時代の評価と 180 度変わることはよくある。そこで長期的学修成果も可視化しその結果を教育改革へ反映させることが必要である。H27、30 年度に卒業生インタビュー調査を、28 年度に企業インタビュー調査を実施し、調査結果をもとに改善点をまとめ方針に活かした。

#### (7)学生の PDCA サイクル

Me-L により豊富なデータが提供されても、それだけでは学生の主体的な振り返りには結びつかない。必要なのは学生自身が明確な目標を持ち、その目標を DP とリンクした目標（「深い目標」と呼ぶ）へと高めることである。そこで、学生と教員が一緒になって行う目標設定・振り返りの作業を制度化した。

### 4. 総合的高大接続改革への展開

テーマ別幹事校として行った取組以外に、本学独自の取組として、入口改革としてのプレゼンテーション力育成型の入試の開発、出口改革としてのプレディプロマ・サプリメント発行の取組を行った。

### 5. テーマⅠ・Ⅱ複合型の幹事校としての取組

幹事校としては、特に最終年度、「AP 全体報告会」開催に向けてチーム AP 一丸となって力を注いできた。残念ながら報告会は中止となったが、代替措置として、本来報告会で行われるはずだった様々なコンテンツを AP アーカイブ上にアップし、AP の成果の波及のために貢献した。

#### 【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
AL を導入した授業科目数の割合	19.7%	45%	45.0%
AL 科目のうち必修科目数の割合	13.3%	7%	9.6%
AL を受講する学生の割合	89.3%	100%	100%
学生 1 人当たり AL 科目受講数	2.8 科目	8 科目	6.4 科目
AL を行う専任教員の割合	72%	100%	100%
学生 1 人当たりの AL 科目に関する授業外学修時間	0.9 時間	7.0 時間	1.0 時間
退学率	3%	1.8%	1.5%
プレースメントテストの実施率	100%	100%	100%
授業満足度アンケートを実施している学生の割合	80.5%	95%	83.4%
授業満足度アンケートにおける授業満足率	80 点	92 点	85.6 点
学修行動調査の実施率	41.5%	95%	75.9%
学修到達度調査の実施率	75.1%	95%	88.9%
学生の授業外学修時間	2.8 時間	15 時間	3.2 時間
学生の主な就職先への調査	無	無	無

(テーマ：Ⅰ・Ⅱ複合型、大学等名：京都光華女子大学短期大学部)